

審査の結果の要旨

氏名 三枝 千尋

人間は、相手の顔が眼に映る時間はほんの一瞬である場合でも、得られた視覚情報に元とその相手が魅力的かどうかを判断することができる。本論文では、顔を時間的あるいは空間的に提示することで、顔の魅力知覚の動的様態を、実験心理学的に検討した研究が報告されている。

第1章では、顔魅力に関するこれまでの研究が、顔の魅力知覚を構成する対象側の要因と評価者側の要因の視点から概観されている。また、顔の魅力知覚の時空間的分析の基礎となる、基本的な視覚処理特性についても述べられており、顔魅力の知覚を支える複合的プロセスについて議論を行い、研究全体への導入がなされている。

第2章では、時間制約のない条件における顔の魅力判断に対して、顔を構成する各要素が顔全体としての魅力に与える影響を検討した実験が報告されている。顔のパーツごとに顔全体の魅力知覚に対する影響度が異なること、また各パーツと配置の影響の強さは評価者の性別によって異なることなども明らかにしている。特に、顔全体の魅力知覚に対するパーツの重要度は目が最も高く、続いて口と鼻が同程度に寄与していた。さらに、各パーツの寄与は使用する画像の色情報の有無に依存しないことから、各パーツの重要性の順序は、視覚情報の物理的な顕著性に依存せず安定していると結論づけている。

第3章では、第2章の実験結果を踏まえ、顔全体の魅力知覚に対して各構成要素が及ぼす影響が、観察時間にもなってどのように変化するかを検討している。目の魅力は刺激提示時間の長さによらず顔全体の魅力に対して高い寄与を示すのに対し、口と鼻の魅力は提示時間が長くなるにつれて寄与が高くなることを明らかにしている。さらに社会的手がかりである視線方向の影響も検討され、視線がそれている顔画像では、パーツから顔全体への貢献が、短時間提示条件において全般的に低下し、顔の魅力知覚における部分情報の統合が抑制されることが示された。これらの結果は、顔の魅力知覚は構成要素の重み付けが時間と共に変化し、かつ視線方向によっても影響を受けるダイナミックなプロセスであることを示唆している。

第4章では、現実場面での魅力知覚に顕著な影響を与える視覚情報であり、顔の最も近傍に存在する周辺情報である髪の影響について検討している。実験の結果、髪は顔全体の魅力に影響を与えるが、髪の魅力評価後に顔の魅力の評価した場合には、髪を与える影響が低減することを明らかにしている。顔魅力の知覚プロセスの時間的特性を考え、

初期に行われる全体的な視覚情報処理においては無意識のうちに髪からの影響を受け、その後局所情報を用いた評価の妥当性が検証される過程において、髪の魅力を先に評価した場合には意識的に髪の影響を排除することが可能になるものと説明している。また魅力判断において、魅力的と判断される顔は似合う髪色範囲が広く、髪色が似合うことで全体の魅力度が高く評価されるという知見は、顔と髪色間の正のループとも言うべき相互作用の存在を示唆していると述べている。

第5章では、総合考察として、前章までの研究結果に基づき、顔の魅力に影響する各要素が、全体としての顔魅力にどのように関与するのかを統合的に理解することを試み、顔の魅力知覚は自動的に一意に決まる静的なプロセスではなく、形態特徴などの生物学的な要素に加えて、視線方向などの社会的な要素、髪型や髪色の変更など装飾を伴う美的要素が時間の中で作用しあう動的なプロセスであると結論づけている。

顔の魅力は見る者の心理プロセスに作用してその後の対人行動を変える、社会的動物としての人にとって特別な意味のある知覚対象である。従来の研究では、顔の魅力判断は、進化心理学的な観点から、形態特徴から自動的かつ一意に決定されると説明されることが多かった。本研究の内容は、顔の魅力の知覚はむしろ、時間と共に構成要素の情報統合のあり方が変動し、また社会的手がかりがその情報統合を促進するダイナミックなプロセスであることを実証的に示し、これまでの仮定の限界を示すものとして重要かつ新規なものである。さらに、実社会での顔の魅力に大きな影響を与えると考えられている髪の影響を調べている点で、学際的な応用にもつながる内容にもなっている。実験の構成や分析なども綿密に行われており、理論的な貢献も十分である。

よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。